

大学卒業後、修学旅行では何度が東京を訪れたことはあったが、一人で訪れるのは十九年振りだった。別に遊びに行っただけではなく、駿台教育研究所主催の「冬期教育研究セミナー」に出席するためだ。テーマは『英単語の語源による指導法』というもので、詳しくは別の機会にする。いや触れないかも知れない。授業では取り入れてみるつもりだ。東京行きが決まってから、どうしても食べたいものがあつた。それは「あんかけ堅焼きそば」で、北海道に来てからも中華料理屋に行くたび注意してメニューを見たのだが、どこにもなく食べられずじまいだった。よく行っていた店はなくなっていたが、別の店にあつたので、そちらで食べた。期待しすぎていた分、何か普通だった。住んでいたアパートにも行ってみた。「平和荘」。貧乏学生が住むにはぴったりのネーミングだ。「もしかしたらなくなっているかも」と思っていたが、まだあつた。アパート前の路地はアスファルトで舗装されていた。建物自体も補修工事等しているのだから、見た目もそんなに変わらず、懐かしかった。それにしても行きも帰りもエ・ア・ドウを予約したのだが機材繰りなどのため飛ばなかった。「道民の翼」を謳うのならもう少し頑張ってもらいたい。



あしたのために

for tomorrow

April 9, 2012→March 1, 2015

その29 January 31, 2014

北海道小樽潮陵高等学校

2年E組学級通信 発行者: 中矢秀人

瀬川先生とのこと

久しぶりの通信です。前号を出して以来色々なことがありましたが、始めさせていただきます。

エリック・クラプトンの曲に“Tears in Heaven”というのがある。そのアコースティックなサウンドは、その後のアンプラグド(unplugged)・ブームの火付け役となった。ちなみにこの曲は、クラプトンが幼い我が子を亡くした時、悲しみにくれて作ったそう。 “Would you know my name if I saw you in heaven? / Would you be the same if I saw you in heaven?”という歌い出しは、仮定法過去を学ぶのに最適だ。仮定法のポイントは動詞の使い方だから、「if」のある方は過去形、ない方は助動詞の過去形一発で押さえられる。ただ、仮定法で歌わなければならないのが悲しい。

瀬川先生とは前任校・札幌西陵高校で11年前に出会った。出会ったとは言っても、所属する学年や部署が違っていたため、当時はまだ学校に存在した煙草部屋で話をする以外は、あまり深い関わりはなかった。私の西陵高校での4年目は、瀬川先生が進路指導部長で私が3年生の担任だった。私は元々がテキトーな人間だから、ずいぶんイカゲンな仕事をしていたのだが、ある時瀬川先生から「もう少し出席簿きちんとした方がいいよ」と言われた。他の人に言われれば、私もへそ曲がりだからカチンと来て逆ギレすらしていたかも知れないが、瀬川先生は知っての通り穏やかな人だから、そのときは不思議とすんなり指導を受け入れることができた。今にして思えば、このとき私は初めて瀬川先生に「出会った」のだ。その日以来、現在も続けているが、私が出勤して最初の仕事はホームルーム出席簿にその日の授業を書き込むことだ。瀬川先生が亡くなったことで、深い悲しみを感している人も未だいることと思う。そんな人は瀬川先生ときちんと「出会った」のだと思う。事実を知ったあとの実力テストのリスニングなんか、まったく耳に入ってこなかった人もいたと思う。それはそれで乗り越えなければならないことなのかも知れないが、仕方のないことだとも思う。ご家族の悲しみには到底及ばないが、きちんと出会えば出会うほど、別れの時の悲しみは深くなる。

そんな瀬川先生とは、これも何かの縁だと思うが、同じ年に同じ学校から同じ潮陵高校に転勤してきた(瀬川先生は仕事ができる人だから、使えない私は抱き合わせ【業界用語では「バーター」】で潮陵高校に来ることができたと、今でも本気で思っている)。潮陵1年目はお互い1学年副担任で、初めは知った人もそんなにいなかったから、瀬川先生とはよく話をした。転勤には慣れているつもりだが、それでも心細いものだから、瀬川先生にはかなり勇気づけられた。その後の2年間は君たちも知っての通り隣のクラスでそれぞれ担任をした。西陵での8年間よりも潮陵での3年間の方が瀬川先生と関わる事が多く、深かったのではないかなと思う。

11月の下旬、瀬川先生が入院される前、「瀬川先生、大丈夫ですか？」と朝のホームルームの行きがけに尋ねたことがあった。「煙草もやめた。癌なんだ。」私は相当動揺していたはずだ。その日の朝のホームルームでは、訳の分からないことを口走ったかも知れない。その後も瀬川先生はしばらく授業を続けられた。私は「そんなことしている場合じゃないのに。一刻も早く入院して下さい」と思っていたが、口には出せなかった。テストが近かったこともあるのだろうが、次の人が困らないよう最後まで仕事をきちんとやり遂げたのは瀬川先生らしさなのだろう。私ならビビってすぐ入院しているところなのに。ただその時は、根拠もなく「今は治る癌もあるし、大丈夫だろう」と何となく思っていた。その後知っている人からの情報で、かなり難しい病気のように知らされたときもこの思いは変わらなかった。実は、この思いはお通夜の時にも抱いていて、「通夜は終わったけど朝になったら目を覚ますんじゃないか」と思っていた。出棺前、花を添えるためにお顔を拝見したときに初めて「瀬川先生、お疲れ様でした」という気持ちに変わった。入院中12月初めにお見舞いしたときには、この通信の前号で伝えたように、思ったよりも元気そうで、「日本酒飲んで、刺身を食べるまでは死ねない」と力強くおっしゃっていた。その時が来た日には、盛大に宴を催そうと心に決めたが、もう叶わなくなった。その間にも病気は進行していたのだろう。冬休みに入って二度目に行ったときには会えなかった。瀬川先生が私に最後に指導してくれたのは喉が腫れて声を出しにくい中、精一杯のしゃがれ声で、「中矢さ〜ん、煙草やめな」ということだった。

冒頭のエリック・クラプトンの曲は “I must be strong and carry on. / Cause I know I can't belong here in heaven.” と締めくくられる。難しいことだよ。でもやる。瀬川先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌。

来週の時間割です。
最後のスキー授業。休まないように！！